

原作脚色者

監督者

撮影者

主演者

山上 島一量
山下 秀一郎
銅本 榮一郎
明石 綠郎
第三百五十二號

紹介 傳奇的構想の映畫である。だから所謂「時代映畫」を見られた人々には飽きたらぬ冗漫さや空虚を感じしめた。然し物語を好む階級の人々には仲々變化に富み、怪奇的で、傳説的である故に喜ばれる。その代り全篇のクライマックスが何れにあるかを望む者には解せない。此の物語の良さはクラシカルな雰囲気である。異國的な匂ひである。が悲しい哉、帝キネは其等を匂はせる長キセットを持つて居なかつた。監督は常に又、觀客の興味が此の物語の持つクラシックよりも、無意味な劍闘にあることを意識せなければならぬ破目にあつた。随つて原作と其の作品とは、一つのギャップを發生せしめた。結局作品としては左程に面白くないものになつてしまつて居る。せめて此の作品に尙、嶄新なる(奇矯に陥ることも)カメラワークでもあつたら、あの尨大にして意味なき「東洋の秘密」程度の効果は充分現はし得たことであらうと思ふ。牧野華人に扮した明石綠郎君は、少し役不足の感である。此の種のものには不適當である。随つて精一つばいの演出をなし得なかつた。

興行價值——全然興味本位に作られて居る故に題名より受ける生硬な豫感さへなければ大いに受けるものである。
(十二月十四日 大阪青邊劇場、神戸相生座)